

報 告

障害のある子どもへの余暇活動支援「チャレンジ」の実際とその課題

山本 佳代子

〈要 旨〉

本稿は、障害のある子どもを対象としたスポーツ・レクリエーション教室「チャレンジ」の実際について報告する。障害のある子どもの放課後や余暇を取り巻く環境はまだ十分に整っておらず、子ども達が充実した余暇活動を過ごしているとは言い難い。「チャレンジ」は、障害のある子どもとその兄弟児を対象として余暇活動支援、健康・体力の維持増進、保護者の支援などを目的として活動している。これまでの実践と参加者の保護者へのアンケート結果から、ボランティアの確保についての問題やプログラムの構成について、また指導法についてなどの課題が明らかとなった。

キーワード：障害のある子ども、余暇活動、遊び、スポーツ、レクリエーション

はじめに

障害のある子どもたちの余暇を取り巻く環境は、1998年に放課後児童健全育成事業（学童保育）が法制化されたことや、新たに居宅生活支援サービス（児童ホームヘルプサービス、児童デイサービス、児童ショートステイ）や障害児タイムケア事業（障害のある中・高校生のための事業）も開始されたことにより少しずつ改善されてきた。障害のある子どもも学童保育の対象であることが公式に認められ、彼らの放課後を保障することの必要性が広まった。障害児加算や指導員の加配などもはじまり、障害のある子どもの入所も増加している。しかし、加算や加配は自治体間で差がみられ、指導員制度（専門的な指導員の配置や研修制度、身分保障など）などの条件整備は未だ不十分であり、障害のある子どもの放課後が十分に保障されているとは言えない^{1, 2)}。

筆者らは、障害のある子どもの余暇活動支援として、活動の趣旨に賛同する学生とともに、月2回子ども達の放課後にスポーツ・レクリエーション活動「チャレンジ」を開催している。現在「チャレンジ」は、障害のある子ども本人とその兄弟児合わせて約10名とボランティア学生約4名で活動している。本稿では、障害

のある子どもへの余暇活動支援「チャレンジ」の実際と今後の課題について報告する。

I 子どもにとってのスポーツ・レクリエーション活動の意義

わが国では、1985年頃から子どもの体力・運動能力の低下傾向が続いているが、近年、体力・運動能力の低下以外にも子どもの体については、保育園、幼稚園、学校現場など様々な場面で異変が表れていることが報告されている。中村³⁾は、肥満傾向児の増加・低体温などの体温異常・疲労感を訴える子どもの増加を指摘している。スナック菓子や清涼飲料水などが、子どもも簡単に手に入れられる身近なものとなり、間食が増え肥満傾向となる、学校の他に習い事や塾で忙しく睡眠時間が減る、ゲームをして疲れてはいても身体を動かしてはいないためぐっすり眠れない、見たいテレビがあり遅くまで起きているなど生活習慣が乱れやすい環境となっている。現在は、これらの生活環境を整えるため、身体作りのために子ども自身が意識して、また周りの大人が積極的に子どもが身体を動かす機会を作る必要がある。

子どもにとって、遊びや運動で身体を動かすということは、走る、跳ぶ、投げる、蹴る、打つなどの基礎的な運動技能を身につける機会でもある。いろいろな動きができるようになる幼児期は、様々な動作を容易に獲得することができる。そのため、体の発育発達段階に合わせて幼児期から体を動かすことに親しみ、多様な動きを経験し基礎的な運動技能を獲得しておくことが望ましい。子どもの頃から体を動かすことに慣れ、その楽しさを知っておくことは、将来余暇活動の選択肢を増やし生活の質を高めていくことにつながる。余暇時間に運動をすることは、生活習慣病の予防やストレスの発散という面からも非常に重要なことである。

子どもが身体を動かす意味は、大人のように生活習慣病の予防や健康のためというだけでなく、それによって社会性を育てたり、集中力を高めるなどの意味もある。上地ら⁴⁾の研究においては、性別に関わらず、友達や家族とよく遊ぶ子どもは、向社会的行動が多く、引っ込み思案行動や攻撃行動が少ないことが明らかにされている。幼児期の運動は遊びにも置き換えられるが、遊びの中にも子どもたち独自の様々なルールがあり、遊びを通してルールを守るとことや、他者への思いやりなどを知ることができる。学童期では、遊びの他にもスポーツに取り組むようになると、チームの一員として試合や練習を行うことが、他者とのコミュニケーション能力を高めることにつながる。

健康、体力の維持・増進からも子どもの頃から運動することが必要である。体力は、筋力や持久力などに代表される行動体力と外部からの様々なストレスに対して体を守る防衛体力に分けられるが、運動はそれら両方を向上させるのに役立つ。

子どもに運動やスポーツに対する興味を持たせ、体を動かすことの楽しさや喜びを教えるために、屋外で遊ぶ、スポーツに親しみ体を動かすという機会を、大人が意識して積極的に子どもたちの生活に取り入れていく必要がある。

II チャレンジの意義と目的

「余暇」は私たちの生活にとって非常に重要な役割を果たしている。充実した余暇時間を過ごすことは生活にメリハリをつけ、生活の質を高める役割を果たす。余暇時間をどのように過ごすかについて、私たちはそれぞれの環境や趣味に合わせて様々な選択肢から選ぶことができるが、障害のある人たちは活動を選択する

ことが困難であったり、選択肢自体が少なくその機会さえ与えられないということもある。近年わが国でも、障害のある子どもの放課後や休日を支援する取組みが発展し、学童保育への障害児加算、短期入所やデイサービスなどの日中一時支援事業、児童デイサービス事業などがみられる。

しかし、わが国において障害のある子どもたちは、余暇の過ごし方について「母親」と一緒に「テレビやビデオ」をみて過ごすことが多い^{1,2,5)}。また家の外での主な過ごし方については「スーパー等買い物」や「ドライブ」が多く、障害のある子どもたちは積極的に体を動かすことなく、受動的に過ごしていることが示されている⁵⁾。一方、於保⁶⁾の10代の知的障害児を対象とした余暇活動に関するアンケート調査では、今後参加してみたい活動の項目で男女とも「スポーツ」が一番に挙げられており、余暇活動について困っていることでは、「近くに活動がない、活動があっても時間が合わない」や「体を使った活動が欲しい」などの回答がみられた。

余暇活動は自分の意志に基づき、望むことを望むときに行うのが最良だが、障害のある子どもの場合個人で行動することが困難であり、様々な場面において特別な支援を必要とすることが多い。事実、「余暇活動について困っていること」の一番に、「親以外の付添・送迎が欲しい」という項目が挙げられているが⁶⁾、親の体調や都合で活動に参加できない場合も多く、障害のある子どもと余暇活動を取り巻く環境は非常に貧しい。

このような状況を踏まえ、障害のある子どもの余暇活動支援を目的として、2004年より西南女学院大学第二体育館にて、障害のある子どもを対象としたスポーツ・レクリエーション活動「チャレンジ」を開催している。「チャレンジ」の第一の目的は、『障害のある子どもに余暇活動の場を提供する』ことであり、その他『レクリエーションや遊びを通して、体を動かすことの楽しさを伝える』・『肥満防止、健康・体力の維持・増進』・『子どもの頃から運動習慣を身につける』・『保護者の運動の場、保護者同士の交流の場を提供する』ことである。余暇時間にスポーツやレクリエーション活動を行うことは、身体にとってストレス解消やリフレッシュ効果などのプラス面があるだけでなく、本人の行動範囲を広げ、家庭や学校、職場以外での新たな人間関係を作ることにつながり、これらのことが社会性を身に付けるのに役立つと考えられる。保護者にとっても、子どもが活動に参加している時間は、保護

者同士の情報交換などの時間に充てることができる。

Ⅲ 活動概要

1. 経緯

活動開始にあたってK市にある小学校へ呼びかけ、募集要項を記したポスター掲示の依頼、特別支援学校のPTAに所属する保護者や特別支援学級の担当教員へ活動の説明及び周知の依頼、同時に学内に向けてはボランティアの募集を呼びかけた。その結果、初回参加者は特別支援学校と特別支援学級の子ども達が15名、ボランティアは主に福祉学科の学生が10名集まった。

活動初日、保護者に再度活動の趣旨を説明し、子ども達の情報を得るために、年齢や所属する小学校、活動する上でボランティアが気を付けなければならないこと、子どもが苦手なことや嫌いな活動について自由に記入できるアンケート用紙を配布した（資料1）。また活動中の方が一の怪我・事故に備え「レクリエーション傷害保険」への加入手続きを行い、2010年からは文章および口頭での説明後に書面による同意を得るようにしている。

活動が始まる前、ボランティアとして活動に参加する学生と事前に打ち合わせをし、活動の趣旨やボランティアとしての心構えを伝えた。活動終了後は、保護者から提出されたアンケート用紙をもとに子どもの特徴を把握し、さらに第1回目の活動での子ども達の様子について意見交換を行った。参加している子ども達はそれぞれ個性豊かで、音楽に合わせて体を動かすことが大好きな子ども、反対に大きな音が苦手な音楽をかけると耳をふさいでしまう子ども、勝敗に対するこだわりが強く負けるとパニックを起こす子どもなど様々である。活動が安全に進められるよう、活動中の子ども達の様子や情報をスタッフ全員で共有した。

現在「チャレンジ」は、子ども10名（男児6名、女児4名）、ボランティア学生主に4名で活動している。子どもの年齢は、3才2名（1名兄弟児）、5才3名、小学2年生3名、小学5年生1名、中学1年生1名と幅広い。一人ひとりの障害名については保護者に尋ねていないため把握できていないが、参加者を募集する際、「障害のある子ども対象」と告知しており、実際、特別支援学校や特別支援学級へ在籍している子ども達が活動に参加している。肢体不自由の子どもはおらず、主に知的障害や発達障害の子どもが参加している。同

じ障害のように見えても、一人ひとり個性があり色々な特徴を持っているため、障害名よりも、子どもが混乱することなくスムーズに活動に参加できるようにするため、子どもの嫌いな活動や好きな活動、運営側が理解しておいた方がよいことについて個別に保護者に確認している。

2. 活動の流れ

活動は月2回第一・三木曜日の16:00~17:30に行っている。活動の流れについては表1に示した。16:00~16:30までは自由時間としており、早く来た子ども達が体育館内を走りまわり、ボール遊びや鬼ごっこをして過ごしている。16:30からはリーダーが主体となり挨拶、出欠確認、体操、筋力トレーニング、ダンス、主活動、整理体操という流れで活動している。子どもたちに活動の始まりと終わりを明確に伝えるため、出欠確認と整理体操は毎回決まった形で行うが、その他は毎回違うプログラムで行っている（表2）。なお、活動は子どもたちの様子を見ながら適宜休憩をはさみ、水分補給や体調の変化に十分気を付けながら進行している。

表1 活動スケジュール

16:00~	自由遊び
16:30~	挨拶 出欠確認
16:35~	準備体操 筋力トレーニング 歩く・走る
17:00~	休憩
17:05~	主活動
17:25~	整理体操 挨拶

3. 活動の詳細

子ども達が集まるまでは明るくリズム感のある音楽を流し、ボールやフラフープなど子ども達がしたいことを自由にできるよう準備を整え、楽しい雰囲気場の設定となるよう心がける。子ども達のなかには初めての場所・人に緊張し固まってしまう子ども、何度か参加していても慣れるまでに時間のかかる子どももいる。子ども達の不安や戸惑いを取り除き安心感が持てるような環境設定をすることが、活動開始前から始まるボランティアや参加者同士でのボール遊びや追いか

表2 2010年活動記録

活動日	参加者	ボランティア	活動内容
3月4日	6名	2名	体操・筋力トレーニング・簡単エアロビクス・新聞破り・新聞ボール遊び・整理体操
3月18日	8名	3名	体操・筋力トレーニング・色々動物歩き・走る・風船遊び・パラシュート・整理体操
4月1日	3名	3名	体操・筋力トレーニング・しっぽとりゲーム・縄跳び・整理体操
4月15日	5名	7名	体操・筋力トレーニング・しっぽとりゲーム・縄跳び・整理体操
5月6日	8名	7名	体操・筋力トレーニング・スカーフキャッチ遊び・手つなぎサッカー・整理体操
5月20日	6名	7名	体操・色々動物歩き・平均台・しっぽとりゲーム・パラシュート・ダンス・整理体操
6月3日	4名	5名	体操・フラフープ・スカーフキャッチ遊び・しっぽとりゲーム・フライングディスク・整理体操
6月17日	9名	3名	体操・簡単エアロビクス・歩く・色々走り・手つなぎサッカー・整理体操
7月1日	10名	5名	体操・筋力トレーニング・電車ごっこストップ・ラン・フラフープ・輪投げ・整理体操
7月15日	9名	5名	体操・鬼ごっこ・休憩・障害物走・整理体操
8月5日	5名	5名	体操・鬼ごっこ・休憩・輪投げ・ボウリング・整理体操
8月19日	3名	3名	体操・色々歩き・走る（外へ移動）・画用紙を剣や望遠鏡に変え探検・水風船遊び・整理体操
9月2日	5名	1名	体操・歩く・走る・休憩・紙飛行機を作る（外へ移動）・探検・紙飛行機飛ばし・整理体操
9月16日	7名	4名	体操・電車ごっこストップ・ラン（外へ移動）・探検・かくれんぼ・整理体操

けっこへとつながり、子ども達がスムーズに活動に入る手助けとなる。ボランティアの学生にも、子ども達が体育館に入ってきた時点で活動は始まっていることを伝え、この時間に子どもとの関係づくりや体調確認を行うよう指導している。それでも動きが少ない子どもや母親から離れられない子どもに対しては、様子をみながら、当日使う予定の道具を見せ、今から何が始まるのかという見通しをつける手助けとし、「どんなことをするのだろう」という期待感を持てるような工夫をする。ある程度人数が揃ったところで、リーダーの合図によりそれまで遊んでいた道具を片付け、活動開始へと切り替える。

初めに体調確認と出欠確認のため、一人ずつ名前を呼び子どもの様子を確認する。その後参加者の状態に合わせて、当日の活動の流れを絵カードや文字カードを用いて説明する。活動中、カードは子どもから見えるところに貼り出しておき、一つの活動が終わったらそのカードを取るということをしておく、子ども達が活動全体の見通しをつける手助けとなる。ただ、カードを必要とする参加者と必要としない参加者が含まれており、中には最初にスケジュールを示すことで、嫌いな活動をするということが分かってしまい、活動中不機嫌になる子どもが出てくることもあり、また流れの中で「次は何をするのか」という期待感がなくなってしまうなど、良い面と悪い面があるためカードは参加する子ども達の状況にあわせて使用している。

次にストレッチ・体操・歩く・走る・ダンスなど、主活動を行う前に体全体の準備運動を行う。歩く、走

る、止まる、スキップ、ジャンプなど簡単な動きを全員で楽しみながら行う。この部分では運動量の確保だけでなく、模倣力や適応力をつけることも目的としている。また、腹筋運動や背筋運動など筋力トレーニングも行う。体操や歩く、走るなどの活動は音楽に合わせてたり、動物をモデルとした色々な動きを取り入れて行うことで、多くの参加者が楽しみながら活動することができるが、筋力トレーニングは普段行わない動きであったり、負荷がきついなどの理由から、できない子ども、できるが嫌がってしない子どもが出てくる。「できないからしたくない、しない」という状態で終わらせるのではなく、ボランティアや友達と二人組になってできる方法や、楽しみながらできる方法を紹介し、「やってみよう」と思う子どもの意欲・やる気を引き出す声掛けと工夫が必要となる。

体操や筋力トレーニングをする際は、なるべく子ども一人に対してボランティアを一人つける。同じ動きをするにしても、子ども達は年齢も障害も様々であり、一人ひとりの達成点が違うため、それぞれの理解や能力に合わせた声掛けや手助けができるようにしている。他に準備運動も含めてダンスをすることもありますが、ダンスは指導者と同じリズムで同じ動きをするため、参加者の意識を集中させるのにも役立つ。これらの活動をおよそ30分程行い、その後休憩を入れ主活動へ進む。

主活動では種目を一つに決め、基本の形から応用の形へ発展していくようにしている。例えばボールを主活動とする場合、初めは、一人でボールに慣れるよう

ボールを落とさないで体のいろいろな場所で回したり、一人で投げる、一人で捕ることをやってみる。次に二人組で投げる、捕る、蹴る、運ぶなどを行い、最後にサッカーをするというように、参加者が意識しなくても徐々にレベルアップしていくようなプログラムを組み立てる。参加している子ども達は、幼児から中学1年生まで幅広く、主活動になると課題ができる子どもとできない子どもがでてくる。できない子どもも運動能力が低いためにできないというだけではなく、集中力が足りずできるけどしない、興味がないからしない、前の活動が気に入りをずっと続けているなど様々である。できない子どもに対しては、なるべく「できた？」とは聞かず、できなくても「体を動かすと気持ちよくて楽しい」という思いが実感できるような進捗を意識している。またできた子どもに対しては、言葉で褒めるだけでなくハイタッチや握手などを取り入れ、あなたができると私たちも嬉しいという気持ちを伝え、喜びを共有する。「できた」という成功経験を増やすことで、本人の自信へとつなげ、またやってみようと思う、そのように循環していくよう支援することが大切だと考えている。最後に整理体操と挨拶を行い終了する。

4. プログラム構成

活動のプログラムは事前に立案する。内容について指導者からボランティアへ注意事項の伝達、1対1で補助が必要な子どもの確認、道具の設定や安全性の確認などを行う。しかし、何人子どもが集まるか、どのようなメンバー構成になるかということは当日その時間にならないと把握できないため、参加者の状況、ニーズに合わせて臨機応変に対応する必要がある。子ども達のなかには、順番が守れない子ども、一つのことに集中して取り組めない子どもがおり、子どもたちがすぐ飽きないよう、一つの活動を短時間で終え、メニューを多く準備しておくようにしている。

8月、9月の夏の活動は、体育館内は非常に暑く、館内で1時間活動が続けることは困難であるため、前半は体育館で基礎的な運動をし、後半は外へ出て学内を探検したり、日陰の涼しい場所で活動している。屋外のプログラムでは、一度外で行うと次の日も子ども達の方から、「外がいい」「探検がしたい」「かくれんぼがしたい」などの声があがった。屋外で集団で遊ぶ経験は、子ども達にとって多くある機会ではないと思われる楽しみにしている様子が伺える。プログラムを組立てるとき、リーダーや保護者側の一方的な思いだけ

でなく、実際活動する子どもたち自身が何をしたいかにも配慮しながらプログラムを組立てる必要がある。また、参加する子ども達が「楽しそう」「おもしろそう」と感じるだけでなく、活動を終えた時、子どもやボランティアを含む参加者全員が「楽しかった」「おもしろかった」という思いへつながるようなプログラム構成が最善だと考えている。

またボランティアの学生は、活動を支えるスタッフとして半年程経験を積んだ後、活動時間中、30分間のプログラム立案、構成、進行を行うリーダー役を時々任せている。プログラムを構成した後、指導と細かい打合せを行うが、実際進行してみると思うようにいかないことも多いようである。しかし、一度これらのことを経験すると、活動中の学生の動きに変化がありとても良い動きができるようになる。それまでは、子どもと一緒にただ遊んでいるという姿勢で、スタッフというよりは子どもと同じ目線で活動していることが多かったが、リーダー役を経験するとただ一緒に遊ぶから、子ども達が楽しむためにはどう動けばいいかということが分かってくるようである。活動を振り返るミーティングでは、子ども達の情報交換に加えて、活動を支えるスタッフとしての動き方や振る舞いについて指導することも多かったが、プログラムのリーダー役を経験するうちに、自分がどのように動くべきか、今、何をすべきかが少しずつ分かってくるようである。

IV 保護者へのアンケートから

活動に対する保護者の意見を聞き、実態を把握し、今後の活動に活かすために2011年4月から8月にかけて保護者へアンケートを実施した(資料2)。アンケート内容は、①活動について、活動時間、運動量、活動回数、参加動機の4項目について尋ねた。②プログラムについては、好きなプログラム、苦手なプログラム、ボランティア学生の関わりについて、活動を通して子どもにつけたい力の4項目について尋ねた。③放課後の過ごし方については、「チャレンジ」以外で定期的に運動する場について、平日の放課後や休日の過ごし方の2項目について尋ねた。最後に活動に対する意見を自由記述で尋ねた。なお、アンケートについては、西南女学院大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

アンケートは6名中4名が答えていた。アンケート

結果から、①活動については、概ね保護者の意向に沿った活動になっていると考えられる。②プログラムについての自由記述では、好きなプログラムでは、しっぽとりや鬼ごっこなどのルールが簡単で、どの年齢でも楽しめるものの記述が多く、嫌いなプログラムには筋力トレーニングや集団での遊びなどがあがっていた。ボランティア学生の関わりについては、「子どもから目を離さずしっかり見ているところが良い」「親子共々楽しく安心して過ごしている」「もう少し厳しく指導を希望」などの記述があった。活動を通して子どもにつけたい力では、「体力」が多く、他に「忍耐力」「バランス」など身体面での力が上がっていた。他にも、「集団行動を少しでも出来るようになってほしい」「学校・家庭以外での人との関わり」「みんなと一緒のことが出来なくてもいいので、その場の楽しさや雰囲気を感じてほしい」「“通う”ということ継続する力をつける」など様々であった。③「チャレンジ」以外で定期的に運動する場があるかという問いには一人だけ「ある」（ダンス教室）が挙げられていた。放課後、休日の過ごし方については「家の中で過ごす」が多く、過ごし方についても「パソコン」「DVD鑑賞」「DS」「Wii」「お絵かき」など受動的な活動が挙げられていた。最後の設問で活動に対する意見を尋ねた項目では、保護者それぞれの思いを知ることが出来た。保護者がどのような思いを持って子どもを活動に参加させているかについて、スタッフ間で共有しておくことが実りのある活動にするためには大切なことだと考える。

V おわりに～今後の課題～

保護者へのアンケートから、活動時間や運動量など活動全般については特に問題はないと考える。プログラムについての自由記述には、「簡単な単純なものなら大丈夫」というのから「もう少しハードな動きを（希望）」など、保護者の思いもそれぞれであった。対象年齢が幅広く、障害の程度もそれぞれ違い、活動を展開する際いろいろな工夫が必要となる。参加している子どもたちだけでなく、保護者一人ひとりに十分満足してもらえるようなプログラムを毎回提供することは難しい。一人ひとりに合ったプログラムの実施ではなく、プログラムの活動内容のなかで、子ども達一人ひとりに合った課題を設定し、それぞれ異なる到達点を目標とするような活動を展開することを目的とする。

また、活動を通して子どもにつけたい力の問いには、

「集団行動を少しでもできるようになってほしい」、「学校・家庭以外での人との関わり」という回答があった。放課後、休日の過ごし方についての問いでは、「チャレンジ」に参加している子どもの多くが、家でゲームなどをして過ごしているということが示された。それらの結果は、障害のある子どもの放課後、休日の過ごし方について書かれた先行研究の結果と同様で、「チャレンジ」に参加している子ども達も、放課後、友達と遊んだり、習い事をして交友関係を広めたりする機会が少ないことが伺われた。「チャレンジ」には学校も年齢も異なる子ども達が参加しており、異年齢の子どもとの関わりや集団行動、協調性などを体験できる機会となっている。身体づくりのためのレクリエーションを提供するだけでなく、子ども達の社会性の向上も視野に入れたプログラム作りをしていきたいと考える。

他に今後の課題として、一番重要なのはボランティアの確保である。現在子ども的人数に対してボランティアが足りず活動に支障をきたしている。参加している子ども達は、ルールを理解することが難しい、集中力がない、言葉だけの指示では伝わりにくい、興奮すると手が出る、集団行動は苦手など色々な特徴がある。子どもたちは、一人で活動に参加することは難しくても、少しの励ましや援助があれば楽しく活動することができる。活動をスムーズに運営するために、できればボランティアは子どもと同じ人数いることが望ましく、1対1での活動を保護者も望んでいる。現在の活動はボランティアの人数が足りず、プログラムの中でできることが限られるという状況で、子ども達一人ひとりの能力・ニーズに叶ったプログラム構成になっているとは言い難い。充実したプログラムを提供するためにもボランティアの確保は重要な課題である。

現在、ボランティアとして継続的に参加している学生は、栄養学科と福祉学科の学生がおり、それらの学生からは、「とても有意義な時間」「障害のある子どもと関わる機会がないので勉強になる」「プログラム企画・リーダーの経験など卒業してからも役立つと思う」など前向きな意見を聞くことができる。学生は、障害のある子どもへの接し方や、支援の方法、活動の意義、プログラムの組み立て方などについて実践を通して考えることができる。今後、ボランティア確保のために、活動への参加の呼びかけや活動の必要性について理解してもらおう努力、また支えるスポーツとしての障害のある人のスポーツやレクリエーションの魅力を発信し

ていきたいと考えている。

次に、活動の目的のひとつに挙げている保護者の運動の場、保護者同士の交流の場の提供についてだが、現在は運動の場を設定することが難しい。ただ、これについては保護者自身が望んでいるかという問題もある。保護者の希望があれば、保護者自身の運動不足解消のため、ストレス発散のため、子どもが活動している同じ時間に近くの違う場所で、ストレッチ体操やリラクゼーションも含めた活動ができればと考えている。保護者がいるために活動に集中できない子どももいるため、子どもにとっても意義があることだと考えられる。そのためにもやはり、ボランティアを確保しなければ活動を開始することができない。

子ども達の余暇活動を支援するという事は、将来の彼らの生活の質を高め、生きがいのある生活を送るということにつながる。今後も安全性に十分に気を付けながら活動を継続していきたいと考えている。

引用文献

- 1, 2) 泉宗孝, 小池将文, 八重樫牧子: 岡山県における障害児の放課後生活実態に基づく放課後生活保障に関するニーズ調査. 川崎医療福祉学会誌vol.15: No.1: 43-56, 2005
- 恒次欽也, 森本尚子, 日暮眞: 障害児の放課後児童健全育成(学童保育)に関する調査研究I—本調査実施に向けての予備調査の概要—
- 3) 中村和彦: 子どものからだに危ない. 日本標準, 2004
- 4) 上地広昭, 竹中晃二, 鈴木英樹, 岡浩一郎: 子どもの身体活動が社会的スキルおよびストレスに対する認知的評価に及ぼす影響. 健康心理学研究16(1): 11-20, 2003
- 1, 2, 5) 津止正敏, 立田幸代子: 障害児・家族の生活実態と地域生活支援. 京都・障害児放課後休日実態調査から. 障害者問題研究. 第32巻第4号: 285-292, 2005
- 6) 於保真理: 10代の知的障害児の余暇活動に関する研究—172人の親からのアンケート調査を中心に—. 湘北紀要. 第25号: 15-21, 2004

参考文献

- (1) 関伸夫: 子どもの体力低下に対する国の取り組み～体力向上の取組みと子どもの変化～. 子どもと発育発達. vol.7No.3: 171-175, 2009
- (2) 堀居昭: 特集子どもの「体力低下」をどう見るか. 日本体育大学スポーツ・トレーニング・センターbulletin(10): 95-99, 2001-03
- (3) 武藤芳照: 子どものスポーツ. 東京大学出版会, 1989
- (4) 四国スポーツ研究会編: 子どものスポーツ, その光と影—生涯スポーツに向けて—. 不味堂出版, 1992
- (5) 鈴木秀雄: セラピューティックレクリエーション 障害の軽減・健康の維持を願う人へのレクリエーション. 不味堂出版, 1995
- (6) 笹川スポーツ財団: 子どものスポーツライフ・データ 2010—4～9歳のスポーツライフに関する調査報告書一, 2010
- (7) 今福裕美, 外館郁子: 障害児の余暇活動のあり方に関する一考察—子どもたちが主体的に楽しめる活動を求めて—. 北海道教育大学コミュニケーション障害研究4: 181-190, 1997
- (8) 宮本文雄, 大野由三: 知的障害者(養護学校卒業生)の余暇活動に関する研究—年齢の要因からの分析を通して—. 東京成徳大学研究紀要3: 163-176, 1996
- (9) 名古屋市学童保育連絡協議会障害児部会: しょうがいのある子どものゆたかな放課後・夏休み. かもがわ出版, 2005
- (10) 津止正敏, 藤本文朗: 放課後の障害児. 青木書店, 1988
- (11) 黒井信隆: 軽度発達障害[LD ADHD 高機能自閉症など]の子を支援する体育遊び. いかだ社, 2007
- (12) 飯嶋正博, 不器用な子どもの動きづくり. かもがわ出版, 2005
- (13) David L. Gallahue, 杉原隆: 幼少年期の体育. 大修館書店, 1999
- (14) 監修財団法人日本体育協会 編集竹中晃二: アクティブ・チャイルド60min. —子どもの身体活動ガイドライン—. サンライフ企画, 2010
- (15) 子安増生, 山田富美雄: ニューメディア時代の子どもたち. 有斐閣, 1994
- (16) 河添邦俊, 正木健雄, 矢部京之助編著: 障害児の体育. 大修館書店, 1981

チャレンジ！！

資料1

名前	男の子・女の子
住所	
連絡先	
年齢・学校名	才 小学校
<p>★苦手なものや活動をする上で気をつけなければいけないことについて教えてください。</p>	
<p>★好きな運動・遊び、またはやってみたいことを教えてください。</p>	
<p>★その他</p>	
<p>ありがとうございました。</p>	

設問1. 活動時間について該当するものに○をつけてください。

- ①長い ②ちょうど良い ③短い

設問2. 運動量について該当するものに○をつけてください。

- ①多い ②ちょうど良い ③少ない

設問3. 活動の回数について、希望する回数について該当するものに○をつけてください。

- ①ひと月に1回 ②ひと月に2回 ③ひと月に3回 ④ひと月に4回

設問4. 活動に参加する動機について該当するものすべてに○をつけてください。

- ①体力づくり ②仲間作り ③活動場所が近いから
④その他 ()

設問5. 活動のプログラムについて、今までの活動で好きな活動はなんですか。

複数回答可

[]

設問6. 活動のプログラムについて、今までの活動で苦手だったものやこれからしてみたいものなど、ご自由にご記入ください。

[]

設問7. スタッフや学生ボランティアの関わりについてご意見がありましたら、ご自由にご記入ください。

[]

設問8. 活動を通してお子さんにどのような力をつけたいと希望されますか。

[]

設問9. 学校と「チャレンジ」以外で、定期的に運動する場所がありますか。

- ①ある ②ない

①に○をつけた場合、それは具体的にどのような活動かご記入ください。

[]

設問10. 平日の放課後や休日はどのように過ごされていますか。該当するものすべてに○をつけてください。

- ①家の中で過ごす ②買い物 ③公園などで遊ぶ ④散歩 ⑤習い事
⑥その他 ()

①に○をつけた場合、具体的にどのようなことをして過ごすかご記入ください。

[]

設問11. その他、活動に関することでご意見がありましたらご自由にご記入ください。

[]

以上です。ご協力ありがとうございました。

Leisure Activities for Children with Disabilities

Kayoko Yamamoto

<Abstract>

This paper reports on the realities of sports recreation classroom "challenges" for children with disabilities. These children do not necessarily have a fulfilling environment surrounding the leisure time and after school. Therefore their leisure activities are not full either. The "challenges" is working on leisure activities and improving their health, support of guardians for children with disabilities and other siblings. Practice and results of the questionnaire from their mothers clarified some problems, such as securing volunteers, program configuration, and teaching methods.

Keywords: children with disabilities, leisure activities, play sports, recreation